

安息日学校教課

第5課 2014年8月2日

いかに救われるか

担当：橋川真理

Note：この聖書研究は、私たちがメンバーとなっているミシガン州にある Lapeer SDA 教会において、安息日学校教課を代理で教えたときのものを日本語に訳したものです。

教課の木曜日の冒頭のところに、「信仰において私たちが自分の必要を認め、悔い改め、罪を告白し、キリストの義を自分のものとして求めるとき、私たちは彼の弟子になります。」と書かれていて、“いかに救われるか”の答えがまとめられています。これらのステップを簡条書きにしますと、次のようになります。

- ①必要を認める
- ②罪を悔い改める
- ③罪を告白する
- ④キリストの義を自分のものとする
- ⑤キリストの弟子になる

ここで最も大切なのは、①の“必要”です。何故ならば、この最初のステップがなければ、後に続く救いのステップも起こらないからです。

そして教課の金曜日の「さらなる研究」のところでは、「『キリストへの道』 第3章を参照してください。」とあり、『キリストへの道』からいくつかの引用文が記されていました。『キリストへの道』は、セブンスデー・アドベンチストの間でとても親しまれている証の書の一つで、人生において最も重要なテーマである“いかに救われるか”を、順序よく明確に示しています。ちなみに、日本語のタイトル『キリストへの道』は、英語では『Steps to Christ』となっていて、それを直訳しますと、「キリストへのステップ・歩み」となります。

この証の書では、一つひとつの章が順序よく進むステップのようになっています。まず、最初の章が「神の愛」となっていて、救いの第一ステップは、言うまでもなく神さまの愛に引きつけられて心が動かされることです。この愛については、前回の第4課「救い」ですでに学びました。その次の2章は「キリストの必要」で、ここでも救いの“必要”を認めることがどんなに重要かが伺えます。そしてその後続く章は「悔い改め」「告白」「献身」「信仰」「弟子としての証拠」と、先程教課にあったのと似たようなステップが記されています。その次は「成長」と「人生と活動」で、教課第6課「キリストにある成長」と教課第7課「キリストのように生きる」というテーマとほぼ同じです。つまり、今期の教課第4課から第7課までは、私たちが“キリストへの道”を迷わずに、しっかりとステップを踏んで前に進むことができるように与えられた貴重な学びなのです。

ただ、“いかに救われるか”をどんなに頭で理解していても、その救いを毎日の生活で経験していなければ、何の意味もありません。救いに関するすべての知識を持つことと、それらを実際に日々活用することとは、全く異なります。救いの経験とはいったいどのようなものかを、言葉や理論で説明するよりも、聖書にある実例を見るほうが分かりやすいので、今日は、よく知られた二人の人物に起こった出来事を、もう一度み言葉で確認しながら、学びを進めていきたいと思えます。

まず、弟子ペテロから始めます。

ルカ22:31~33節には、まもなくキリストを三度も否定してしまうペテロに対するイエスさまの警告が記されています。32節には「…あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と日本語の聖書にあります。KJVでは“when thou art converted”と訳されていて「あなたが改心したとき」となっています。これを言い換えれば、その時ペテロは、真の改心をまだ経験していなかったのです。ペテロは、キリストに最初に従った弟子たちの一人で、三年半もの間イエスさまのそばにいました。それなのに何故ペテロは、心からの改心の経験ができずにいたのでしょうか？ その原因と思われるヒントが、次の33節にあるペテロの回答です。「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です。」と、この時彼は自信とプライドに満ちた宣言をしました。教課日曜日のところでは、自分の真の必要を認識することができない“霊的な盲目”のことに触れています。まさにペテロは、自分の真の必要を認識することができない状態にいたのです。

『キリストへの道』第3章:「悔い改め」の中で、「高慢 (原文:pride・プライド)、我欲 (原文:selfishness・利己心)、貪欲などは責められず、見過ごしされがちであります。しかし神は、こうした罪をとくにきらいたもうのであります。」と書かれています (34頁)。肉体的な病気の症状に全く気づかず、医者に助けを求めないのと同じように、霊的な病気の症状に自覚がないと、救いの助けを求めることはできません。特に、「高慢な者 (原文:pride・プライド)はなんの必要も感じないため、キリストに対して心を開いて」しまうと、同じ引用文は続いて警告しています (34頁)。キリストに心を開いてしまうことは、唯一の救いの道を閉ざしてしまうことですから、先ほども触れた“必要を認める”ことの重大さが、ここでも改めて確認できます。

教課は、日曜日の最後の質問で「罪悪感はしばしば良くないものですが、聖霊はあなたの霊的利益のために、これをどのように用いてくれましたか。」と問うています。罪悪感には、二面性あります。一つは、あまりにも重い罪悪感に打ちのめされて、絶望感を抱いたまま希望を失い、信仰を放棄してしまう危険がある面です。一方では、罪悪感是我们が罪を犯し、心の病に犯されていることを知らせてくれる、“霊的な神経”のような面です。歯の痛みを感じなければ歯医者に行かないのと同じように、心の痛みを感じなければ、大医師であられるイエスさまに行く必要を認識することはできません。例えば、人間が嘘をついたり、物を盗んだり、挙句の果てには人を殺しても、何の罪悪感も感じなかったら、いったいどうなるのでしょうか?救い主の必要性を全く自覚しない人間ばかりの、恐ろしい世の中になってしまいます。だからこそ神さまは私たちの中に、罪悪感を植え付けてくださっているのです。ただ、必要を認めてイエス・キリストのもとへ行かなければ、罪悪感の重さに私たちは押しつぶされてしまいます。

ではルカ22章に戻って、実際どのようにペテロがキリストの必要を認識して救いを求め、真の改心を経験することができたかを見てみましょう。54~60節には、イエスさまが捕らえられ大祭司の邸宅へ連れて行かれた時、ペテロは遠くからついて行ったことが書かれています。そして彼が主を三度も否定してにわとりが鳴いたその瞬間、「主は振りむいてペテロを見つめられた」とあります (61節)。まさに、このイエスさまの愛のまなざしによって、ペテロは救われたのです。

各時代の希望下208~211頁には、この出来事について詳しく記述されていて、非常に貴重な光が秘められています。この箇所によりますと、イエスさまがふり向いてペテロをごらんになった時、そのまなざしを感じたペテロの目は、主にひきつけられました。つまり、イエスさまの目とペテロの目が合ったのです。その時のイエスさまの

「そのやさしい顔つきのうちに、ペテロは深いあわれみと悲しみとを読んだが、怒りのかげはなかった。青ざめた苦難の顔、ふるえる唇、あわれみとゆるしの顔つき—そうした光景がペテロの心を矢のように刺し通した。良心がめざめ、記憶がよみがえった。…」と記されていて、その後、ペテロは断腸の思いで法廷を走り出ます。彼は、どこへ行くのか自分でも分からないまま孤独と暗黒のうちに道を急ぎますが、つい数時間前イエスさまがただ一人で祈りのうちに泣き苦しんでおられたのと同じ場所、ゲッセマネにたどりつきます。激しい後悔と罪悪感に襲われ、ペテロはもう「死んでしまいたい」と思ったくらいでした。しかし彼はそこで、「血の汗にまみれ、苦悩にけいれんしていた主の苦難のお顔」を思い出して激しく泣きます。この時ペテロは、主の深い愛に大きく動かされたのです。こうしてこのプライドの高い弟子は、初めて自分の醜い姿に気づき、キリストの必要を心から認識することができました。そしてペテロはこのゲッセマネの経験を基点とし、“キリストへのステップ”を一歩いっぽ進んでいったのです。

私たちに示されている道も、全く同じです。ペテロが見た、深いあわれみと悲しみに溢れたイエスさまのみ顔に、私たちが出会うことができる場所は、もちろんみ言葉です。み言葉の様々な箇所描かれているやさしい赦しのみ顔が、私たちの汚れた心を矢のように刺し通す時、罪を犯し続ける自分の醜い姿がくっきりと浮かび上がります。その時初めて、キリストの必要を心から認識することができるのです。そして私たちもペテロと同じように、罪を犯したと気づいた瞬間、信仰によって“ゲッセマネ”に走って行けば、罪悪感に押しつぶされずに真の悔い改めと赦しを経験することができます。

教課の月曜日には、「罪を認めるだけでは十分とは言えません。悔い改めが伴わなければならないのです。悔い改めの聖書的な意味には、自分の罪を認めること、罪を犯してきたことを悲しむこと、そして、これ以上罪を犯したくないと願うことの三つの側面が含まれます。どれか一つでも欠けているなら、それは真の悔い改めではありません。」とありました。確かにそうです。でも、私たちが悔い改める時、罪自体を悲しむのではなく、罪を犯したために生じる辛い結果を悲しむことがしばしばあります。そして、私たちは《こんなに辛いのはいや、もう罪は犯したくない》と願います。心からそう願っているのに、何故、私たちは再び罪を犯してしまうのでしょうか？それには二つの理由が考えられます。一つは、まだ罪自体の恐ろしさを認識していないこと。もう一つは、たとえ罪自体を悲しんでも、もう罪を犯したくないと願うだけでは、十分ではないことです。

『キリストへの道』22～23頁には、「悔い改めとは、罪を悲しむことと罪を離れることを含みます。人は、罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではありません。心の中で全く罪から離れなければ、生活にほんとうの変化は起こらないのであります。」罪を犯したくない…と単に願うことと、心の中で罪から離れて捨てることとは、全く違います。ペテロは、イエスさまの愛のまなざしに引きつけられた瞬間、罪がもたらす結果だけではなく、自分の犯した罪自体の恐ろしさを悟ることができました。だから彼は、神さまが最も嫌われる罪であるプライドを、捨てることができたのです。これこそが、真の悔い改めです。このペテロの経験は、「神の慈愛があなたを悔い改めに導くこと」を証明し、私たちに希望を与えてくれています（ローマ2:4）。

では次に、二人目の人物ザアカイに起こった出来事を見てみましょう。

ルカ19:1～10に登場する取税人ザアカイの話は、子供たちにも親しまれていて、とても有名です。皆さんもご存知のように、ザアカイはイエスがどんな人か見たいと思っ
ていましたが、背が低かったため、群衆にさえぎられてイエスさまを見ることができませんでした。

この“群衆”について学べることは、二つあります。

その一つは、教会や家庭の中で、まだ“背の低い”子供たちが、“背の高い”大人たちにイエスさまを見ることをさえぎられている場合が多いことです。これは肉体的な背の違い（大人と子供）と霊的な背の違い（長年教会員である人と、新しく入ってきた人）と、両方に適用できます。つまり、信仰生活が長い“背の高い人たち”が、イエスさまのご品性とは反対の品性を反映しているため、まだ幼い“背の低い人たち”からイエスさまの真のみ姿をさえぎってしまうことがあるのではないのでしょうか。

もう一つは、「世の快樂、生活上の心配事、悩み、悲しみ、他人の欠点、または自分の欠点や不完全さ」などに私たちの心がひかれて、イエスさまのみ姿がさえぎられてしまうことです（キリストへの道96頁を参照）。

ルカ19章に戻りますと“背の高い群衆”がザアカイの前に立ちふさがった時、彼は「前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った…」とあります（4節）。ザアカイは《私は背が低いから、仕方がない…》と諦めず、自分の最善の努力を払ってすぐに行動をとったのです。彼はそれほどに、イエスさまが見たかったのです。これこそが、生きた働く信仰です。

その信仰にイエスさまは答えて「ザアカイよ…」と、上を見上げて言われました。ペテロの時と同じように、この時イエスさまの目とザアカイの目が合ったのです。キリストの愛に満ちたまなざしを受けた時、ザアカイは自分の罪の恐ろしさを悟り、またそれを心から悲しみました。そして自分の必要を心から認識しました。だからこそ、彼は急いで木からおりてきて、喜んでイエスさまを我が家へ迎え入れたのです。それからザアカイは、「自分の財産の半分を貧民に施します…不正な取立ては、4倍にして返します」と、自分の実生活を変えるステップへと進みます。《もう罪を犯したくない!》と単に願うだけではなく、罪から離れて捨てさることを誓ったのです(8節)。これが、真の悔い改めです。

その後続くイエスさまの「きょう、救いがこの家にきた」というお言葉には、深い意義が含まれています(9節)。ここでキリストは、救いがザアカイの家に来たのは昨日でもなく、明日、或いは遠い将来にくるのでもない、救いがきたのは“今日”だとおっしゃっています。それは、食欲の罪に支配されていたザアカイが、キリストと出会ったその日、罪から解放されて救われたからです。この経験こそが、真の救いです。すなわち救いとは、私たちが罪の奴隷から自由を得ること、罪からの解放を日々経験することなのです。救いとは、いつの日か天国に行くことや、永遠の命を得ることだと思われがちですが、そうではありません。天国は、罪から救われた人々が暮らす単なる場所であり、永遠の命は、罪から救われた人々が結果として受ける賜物です。つまり、救いとは、今でも毎日の生活で実際に経験できる、素晴らしい恵みなのです。だから聖書は「今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」と説いているのです(第2コリント6:2)。

更に、ここで大切な鍵となるのが「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」と、ザアカイにイエスさまが語られたお言葉です(ルカ19:5)。証の書には、「魂に救いがのぞむ(原文: salvation comes to the soul・魂に救いが来る)のは、キリストが個人的な救い主として受け入れられるときである。ザアカイはイエスを自分の家庭の一時のお客としてばかりでなく、魂の宮に住むおかたとして受け入れた」とあります(各時代の希望中378~379頁)。私たちも、イエスさまを週に一度の安息日にお迎えするお客さま…或いは困った時や助けが欲しい時だけに一時的にお迎えする方ではなく、私たちの魂の宮に毎分毎秒住まわれる個人的な救い主として“今日・今”お迎えする時、救いが来て、罪の奴隷から解き放たれる過程が始まるのです。

ザアカイのように、どんなに巨大な“背の高い障害物”が立ちはだかっっていようとも、《イエスさまにどうしても会いたい…》と最善な努力を払って行動に移し、生きた信

仰を働かせば、み言葉をとおして私たちはキリストの“愛のまなざし”を受けることができます。そして真の悔い改めを経験し、救いにあずかることができるのです。その結果として、毎日の生活に少しずつ変化が現れてきます。ザアカイがとったステップこそが“いかに救われるか”というステップなのです。

ペテロやザアカイの心を変えたイエスさまの“愛のまなざし”の力について、大変興味深いことが証の書に記されています。カナの婚礼で、キリストが水をぶどう酒に変えたという一番最初の奇跡は良く知られています（ヨハネ2:1～11）。その出来事についてホワイト夫人は、「キリストは水がめに近づいたり、触れることもされなかった。ただ水を見ただけで、その水は純粋なぶどうのジュースに変えられた」と書かれています（This Day with God 366頁）。つまり、キリストが水を見られただけで、奇跡は起こったのです。それと同じように、ペテロやザアカイに投げかけたキリストの“愛のまなざし”は、彼らの堅い心を打ち砕き、罪から離れて捨てるという悔い改めをもたらしたのです。そして罪深い心を、清い心に変えてしまうという素晴らしい奇跡を起こしました。それほどに、イエスさまの“愛のまなざし”には、偉大な力が秘められているのです。

私たちが救われるためにキリストの“愛のまなざし”を常に見ることの重要さは、今週の暗唱聖句にも明確に記されています。「そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」（ヨハネ3:14～15）この聖句は、教会の指導者であったにも関わらず、最も基本的な救いに関する真理をまだ悟っていなかった神学者ニコデモに、イエスさまが語られたよく知られたお言葉です。この聖句のキーワードは、“上げる”という言葉です。

教課の安息日午後「今週のテーマ」のところでは、民数記21章に記されている有名な出来事を説明し「…あの青銅の蛇は、私たちが救うために私たちの罪を負う者となられたキリストの象徴でした。信仰によって、私たちは十字架に上げられたキリストを見上げ、『年を経た蛇』であるサタンの死のとげからの癒しを手に入れることができます。さもなければ、私たちは罪のうちに死ぬ運命にあるのです。」とありました。古代イスラエルの民が荒野で蛇に噛まれたとき、青銅の蛇はさおの上に掛けられました。何故でしょうか？そもそも蛇という生き物は、「おまえは腹で、這い歩き…」とエデンの園で神さまにのろわれてからは、地を這うことしかできませんでした。地面に置いたままの青銅の蛇では、噛まれた人々全員が見ることはできません。だから青銅の蛇を高く上げるようにと、神さまはモーセに命じられたのです。「それを見るな

らば生きる。… すべてののへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで生きた。」とあります（民数記21:8～9節）。聖書全体に記されている福音を、一言でまとめるならば「Look and Live・見て、生きよ」となります。

それと同じように、人間の罪を負われた「人の子もまた上げられなければならない」のです。それは、世俗的で欲の深い取税人ザアカイのように人々から嫌われて“背が低い”人間でも、誰でも、十字架を見上げることによってキリストの“愛のまなざし”をしっかりと自分の目で受けることができるようにするためでした。蛇に噛まれて永遠の死を宣告されたこの世すべての人々は、キリストを見上げて信じることによって、死のとげから癒しを受け、永遠の命を得ることができるのです。私たちは、高く掲げられたキリストの“愛のまなざし”を常に見ていれば、罪から癒され、罪の支配から徐々に自由になっていく…という“救いの経験”を持つことが、ザアカイのように“今日”でも可能なのです。

ここからは、イエスさまが自ら「人の子を上げる」ことについて語られた二つの箇所を更に探っていきましょう。

① ヨハネ8:21～31節

すぐ前の20節には、イエスさまは「宮の内で教えられていた時」と記されていますので、21節から続くお言葉は、宮の内、つまり古代のユダヤ教会の信徒たちに対して語られたことが分かります。これは、霊的イスラエルの民・キリスト教会の信徒たちに対するメッセージでもあります。21節と24節では、キリストを信じない者は「自分の罪のうちに死ぬであろう」というフレーズを、イエスさまは3回も繰り返して警告されています。そして28節には、「あなたがたが人の子を上げてしまった後はじめて、わたしがそういう者であること、また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していたことが、わかってくるだろう」とあります。ここにある「あなたがた」というのは、もちろんキリストを十字架に架けたユダヤ教会の人々ですが、私たちも含まれています。それは、私たちが光を受けたのに罪を平気で犯し続けることは、私たちがイエスさまの手足を釘で打ち、十字架に再びつけてしまうことと同じだからです。（ヘブル6:4～8節を参照）。

イエスのお言葉を聞いた「多くの人々がイエスを信じた」とあり、それらのユダヤ人たちに対して、キリストは「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。」とおっしゃいました（ヨハネ8:30～31）。

イエスさまを単に信じるだけでなく、み言葉に留まり、み言葉に従うことが、真の弟子になる条件である…という意味です。これと同じことが、木曜日の「イエスに従う」のところで詳しく説明されていました：「福音書において『従う』という動詞は、ほとんど『弟子』の同義語になっています。… あたかも、イエスを信じることのほうが、彼の言葉に従うことよりも重要であるかのように、両者を分けようとする人たちがいます。しかし、イエスはそのような区別をなさいませんでした。彼にとって、二つの側面は密接に関係しており、真の弟子となるために不可欠なものです。」

でもどうして、み言葉のうちに留まることがきわめて重要なのでしょうか？

それは、み言葉にある真理を知ることによって、その真理が私たちに自由を得させてくれるからです（ヨハネ8:31）。ここでの“自由”とは、《もう神さまの掟に縛られないで、我々は自由に生きることができるようです…》と勘違いしているクリスチャンが多くいますが、果たしてそのような意味でイエスさまは語られたのでしょうか？そのすぐ後に続く33～36節を読めば、決してそうでないことが一目瞭然です。イエスさまは「すべて罪を犯す者は、罪の奴隷である」と宣言され、真の自由とは、罪の奴隷から解放されることである…とここで教えられています。しかし、真理だけが罪からの自由を得させる力があります。誤謬に、その力はありません。罪そのものから解放されることこそが、救いの経験であることを先程ザアカイの話から学びましたが、そのためには、み言葉の真理を知り、真理に従うことが不可欠です。イエスさまが3回も繰り返されたお言葉“自分の罪のうちに死ぬ”か、イエスさまのお約束を信じて“自分の罪から自由を得て生きるか”、その選択は私たちに与えられています。

② ヨハネ12:32～33節

32節にある「そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。」というイエスさまのお言葉は有名です。キリストの十字架には、まるで巨大な磁石のように、すべての人間を引き寄せる偉大な力が秘められています。

しかし、私たちは日々の生活において、十字架に架けられたキリストの“愛のまなざし”を、実際にみ言葉をとおして見つめているのでしょうか？

私たちは《もう罪を犯したくない》と願ってはいますが、現実には毎日罪に支配され続けています。その原因は、ペテロのように神さまが最も嫌われるプライドや利己心、

貪欲によって“靈的な盲目”となってしまう、自分の真の必要を認識することができなくなっているからではないでしょうか。でも、キリストの“愛のまなざし”を常に仰ぐことによって私たちは神さまの愛に強く引き寄せられ、み言葉に記されている真理を知り、その真理に従う力が与えられます。その結果、罪の奴隷から自由を得ることが可能となるのです。

では最後に、十字架について記されている驚くべき光を、証の書からの引用文を二つほど皆さまと分かち合い、共にじっくりと考えてみたいと思います。

引用文①

Signs of Times 1889 年7月12日

「たとえ人類が抹消されて、他の被造物が地球に住むとしても、正義の王座は永遠に確保されなければならない。… カルバリの十字架は、墮落していない世界、天の万物、サタンのエージェントたち、墮落した人間など、この宇宙すべての者たちに仰ぎ見られ、すべての者の口がふさがれる。」

“The throne of Justice must be eternally and forever made secure, even though the race be wiped out, and another creation populate the earth. … The cross of Calvary would be looked upon by the unfallen worlds, by the heavenly universe, by Satanic agencies, by the fallen race, and every mouth would be stopped.”

十字架は、罪を犯した人間のためにキリストが地から引き上げられたことを象徴し、救いを求める人々に仰ぎ見られている…と言うことは、クリスチャンなら誰でも分かります。しかし、十字架の意義とは、それだけではないことが上記の引用文から学べます。それを分かりやすく3つのポイントにまとめます。

- ・十字架は、たとえ地球にいる人間たちすべてが抹消され、罪のない別の被造物がこの地球に住んだとしても、神の正義を守るために必須であること。

- ・十字架は、罪を犯したサタンと悪天使や人間だけでなく、この広い宇宙に存在する罪を知らない天使や罪のない世界に住むあらゆる者たちのためにも高く掲げられ、仰ぎ見られていること。

- ・十字架は、この宇宙に住む「すべての者の口がふさがれる」ことを成す。すなわち、十字架を見れば、罪に対する言い訳が何もできなくなる。

でも何故、罪を知らない者にとっても、十字架が必要なのでしょうか？罪が無いならば、救いは必要ないはずなのですが…。

その答えは、二つ目の引用文にあります。

引用文②

Bible Commentary 5巻1132頁・スタディバイブル新約211～212頁

「十字架上におけるキリストの死は、死の支配力を持つ罪の創始者の破滅を確かなものとした。サタンが滅ぼされると、悪に誘われる者はいなくなり、贖いは二度と繰り返される必要はない。そして神の宇宙において再び反逆が起きる危険性もなくなるのである。この暗黒の世において効果的に罪を抑制する唯一のものが、天国において罪を防止するのである。キリストの死の重要な意味が聖徒たちとみ使いたちとに明らかにされる。墮落した人間は世の初めからほふられた小羊なくしては神のパラダイスに住まいを持つことができなかつた。そうであるなら、我々はキリストの十字架を勝ち誇るべきではないだろうか。天使たちはキリストに栄光と誉れとを帰す。それは、彼らでさえも神のみ子の苦悩を仰ぐことによるのみ安全だからである。天のみ使いたちが背教から守られているのは、十字架の効力によるのである。彼らも十字架による以外は、サタンが墮落する以前の天使たちと同様に、悪に対して安全ではないのである。天使の完全は天において全うされなかつた。人間の完全は至福の樂園エデンにおいて失敗に終わった。天国でも、地上においても安全であることを望む者は皆、神の小羊を仰ぎ見なければならない。…」この後に続く212頁も、是非お読み下さい。

ここで神さまが私たちに与えようとされている光は、あまりにも壮大で神聖であるため、一度読むだけではあまりピンと来ないかもしれません。何度も繰り返して読み、吟味した時初めて、とてつもないほどの眩しい光が少しずつ見えてくるのではないのでしょうか。

この引用文を、もう少し分かりやすく砕いて、4つのポイントにまとめてみます。

- ・キリストの十字架は、罪の創始者であるサタンの破壊を確かなものとした。
- ・この世において、十字架の効力だけが罪を抑制する力であり、ほふられた小羊を仰ぎ見なければ、墮落した人間は天国に住むことはできない。
- ・天使たちでさえも、キリストの苦悩を仰がずには背教から守られることはなく、天国は安全ではない。
- ・ほふられた小羊だけが、この宇宙全体において罪を防止する力を持っており、再び反逆が起る危険性を永遠に無くすことが出来る。

キリストとサタンとの大争闘における十字架の意義と、罪深い人間の贖いにおける十字架の必要性は、よく理解できます。しかし驚くべきことは、罪を一度も犯したことの無い天使たちにとっても、十字架が必須であるということです。このことが理解できた時、十字架の深い神聖な意義が更に見えてくるのではないのでしょうか。

実は、この引用文を前にも読んだことがあったのですが、今回改めて読んだ時、思わずハッとして、あることを思い出しました。それは、黙示録をずっと読んでいきますと“小羊”が何度も繰り返し登場していることです。KJVではこの小羊を“Lamb”と、大文字の“L”を用いて、イエス・キリストだとすぐ分かるように訳されています。例えば、黙示録13:11節の「小羊のような角」を二つ持っている「ほかの獣」の箇所では、“lamb”と小文字になっていて、キリストとはっきり区別されています。ちなみに、大文字の“L”から始まるLamb・小羊は聖書全体で28箇所があり、そのうちの26箇所が黙示録にあります。残る2箇所は「見よ、神の小羊」と、バプテスマのヨハネが宣言した有名なところ（ヨハネ1:29、36）。

黙示録に行って5章を見ますと、幾万、幾千という大勢の天使たちの、天における礼拝が描写されています（11～14節）。その礼拝の的は、もちろん「ほふられた小羊」であられるイエス・キリストです（6, 12節）。以前よく不思議に思っていたことは、何故天国で、イエスさまが「ほふられた小羊」として、罪からの救いを必要としない天使たちに拝されているのか…ということでした。今回その答えが、先程の証の書にあったのです。そのことを理解した瞬間、心が震えるような思いに駆られました。

《ええ？天国という完全な世界にいる完全な御使いたちでさえも、ほふられた小羊を常に仰ぎ見ていないと、罪から守られないの？それならば、こんなに汚れた邪悪な世界に住んでいる罪深い私たちは、その何千倍も、いや何億倍も、ほふられた小羊をいつも見上げている必要があるのに、私たちはその必要にさえ気づかないまま罪を犯し続け、毎日を過ごしている…天使から見た私たちの無関心さは、何と恐ろしいことであろう…》というような思いでした。

でも何故、黙示録に“Lamb・小羊”が何度も繰り返して登場するのでしょうか？

それは、再臨前に起る最後の戦いが繰り広げられる時、神の民は常に「小羊と共にいて…小羊の行く所へは、どこへもついて行く」必要があるからです（黙示録14:1, 4）。そうしないと、獣とその像を拝んでしまう危険があるのです。いつも小羊を「見て、

生きる」ことが、生きたまま再臨を迎える人々にとって、永遠の生死を左右するほどに必須なことがここで分かります。

ではもう一箇所、聖書の一番最後にある黙示録21章と22章に登場する“小羊”を見てみましょう。この場面では、千年期が終わり、新しいエルサレムがこの地上に降りてきて、美しい永遠のみ国が描かれています。この二つの章には、“Lamb・小羊”が6回も出てきますが、そのことも不思議に思っていました。

《“小羊”と聞くと、十字架の犠牲、贖いの血や苦悩の死を連想してしまう。でも何故、涙も、死も、悲しみも、叫びも、痛みもない場所であっても、イエスさまはまだ“小羊”なのか…》という問いでした。例えば、黙示録21:22節にある「…主なる神と小羊とが…」という箇所では、“小羊”の代わりに、“子なる神”や“イエス・キリスト”という言葉がヨハネが用いてもよかったはずですが、それでもあえて聖書は“小羊”と語っている理由が今回分かり、やっと納得できました。それは、全宇宙の者たちが罪から守られるためには、永遠のみ国においても“ほふられた小羊”をすべての者が絶えず仰ぎ見ないと、再び罪や背教が起ることを防ぐことはできないからなのです。何と、小羊を「見て、生きる」ことは、全宇宙の永遠のテーマなのです!!

『いかに救われるか?』の答えは、天使であろうが人間であろうが、地球に住もうが遠く離れた宇宙の果てに住もうが、昔も今もとこしえに同じなのです。罪から守られ救われるためには、十字架上で最も完全に現わされたイエスさまの“愛のまなざし”を、み言葉をとおして日々見つめること以外にはありません。み言葉にあるイエスさまの“手とわきに残ってる釘の跡”を、信仰の手をのぼして触れることによって、疑い深かったトマスのように、「わが主、わが神」と私たちの信仰が強められるのです。

黙示録22:3～4節には、「… 神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。…」とあります。天のみ国では、人間の中で誰も見たことがない、父なる神さまの御顔を仰ぎ見る事ができるのです（ヨハネ1:18、第1テモテ6:16を参照）。その御顔は、イエスさまと全く同じ愛と慈しみに満ち溢れた御顔です。一人でも多くの人々がその御顔に今日出会い、永遠に小羊を「見て、生きる」ことができますように…と切に願っています。

完